

## V. まとめ

今回の調査で検出された主な遺構は、縄文時代の竪穴住居跡15棟、焼土遺構13基、土坑類43基、柱穴列2基、陥し穴状遺構1基、古代～中世の堀跡1条である。後期旧石器時代のナイフ型石器や縄文時代草創期の打製石斧も検出されたが、これらの時代の遺構は検出されなかった。

調査区は、南東から北西に向かい緩やかに傾斜しているため調査区南端部は開田時に激しい削平を受け遺構の壁面等の消失が著しい。特に最南端部は、耕作土直下に地山が露呈しており15号住居跡や14号住居跡の残存状況は不良であったが、遺構の残存状況にかかわらず第IV～V層での検出は比較的容易であった。

基本層序第IIIa層が遺跡の最上検出面となったが、この層は調査区の北端部においても削平を受けているため層厚は不明である。従ってこの層から本来検出されるべき遺構が開田により消失あるいはその殆どが失われ、遺物のみが遺構外から出土している可能性も多分に考えられる。本項においては、この点についても遺物の出土量等から言及すると共に、遺構と遺物について若干の考察を加えまとめとしたい。

### 1. 遺構

#### (1) 竪穴住居跡

住居跡を出土した遺物から時期を推定すると、早期末葉12棟（表裏縄文系土器）、前期前葉1棟（大木2a式：葺瓦状撲糸文、網目状撲糸文、羽状縄文系土器）が検出され、遺跡は早期末葉～前期前葉を中心とする集落跡であることが明らかとなった。明確な炉跡が検出された住居は6号住居跡と13号住居跡の2棟のみである。住居跡の周辺から検出された焼土遺構は近接する住居跡に伴う炉跡（屋外炉：地床炉）である可能性が高いと考えられる。

4・15号住居跡の2棟は残存状況が不良で時期を特定できる遺物は出土していない。これらの周辺では羽状縄文系土器が検出されており、規模や形状からこの2棟は前期前葉の遺構であると考えられる。

また、早期末葉の表裏縄文系土器が出土した住居跡の形状は概ね不整形であるが、羽状縄文系土器が検出された住居跡は比較的整った隅丸方形に近い形状を示している。遺跡内では不整な橢円・円形から隅丸方形や方形へという形状の変遷が表裏縄文系から大木1～2a式への土器変遷に対応するように思われる。

県内の早期末葉の表裏縄文系土器が検出された類例は本遺跡を含め7遺跡36棟である。これらの内検出状況の良好なもの18棟を本遺跡の15棟を加え青森県の売場遺跡、長七谷地遺跡や赤御堂遺跡の5棟（赤御堂式、早稻田5類期）を対比させたものが第91～93図である。

平面形は多種にわたり時期的な共通性は見られない。分類は炉（焼土）を床面中央付近に伴うTYPE Iと壁際に伴うTYPE II、炉を伴わないTYPE IIIの3種に分類した。この時期の住居跡から本遺跡でも周溝は検出されず、他の遺跡と同様の調査結果を得た。

県内の遺跡においては、炉と考えられる焼土が検出され住居跡は権現前遺跡で13.3%で他の遺跡は33.3%、壁際に焼土が検出された住居は権現前遺跡が13.3%、他が5.6%と住居内で炉が検出されない例が圧倒的に多く、住居周辺で検出された焼土は住居に伴う屋外炉の可能性は高い。壁際の焼土の詳細については焼失住居等の可能性も考えられるが詳細は不明である。

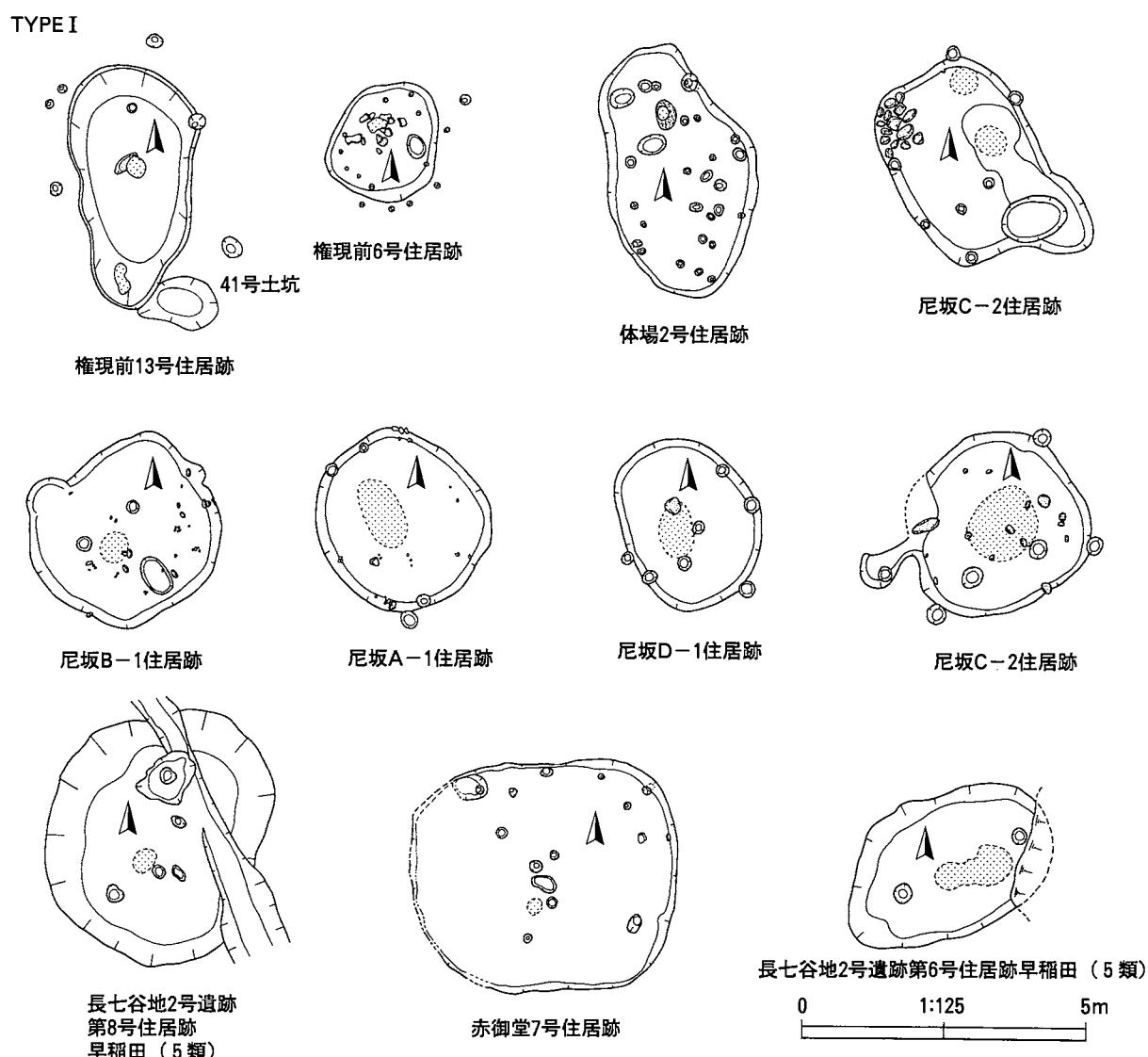
柱穴の配置については休場4号住居跡、糀口1号住居跡が権現前5号住居跡の柱穴配置と類似しており、これら2棟の住居跡も、テント形の上屋を持つ構造であると推定される（写真図版6参照）。また休場7号

住居跡、尼坂A-1号住居跡、同C-1号住居跡、大渡野Ca56、同Cf12号住居跡は、権現前6号住居跡、同7号住居跡と同様の形状を持つものと考えられる。上屋は円錐～ピラミッド状と推定される。5号住居跡は壁柱穴の残存状況も良好で、該期の住居構造を研究する上で貴重な資料を得られたと考えられる。

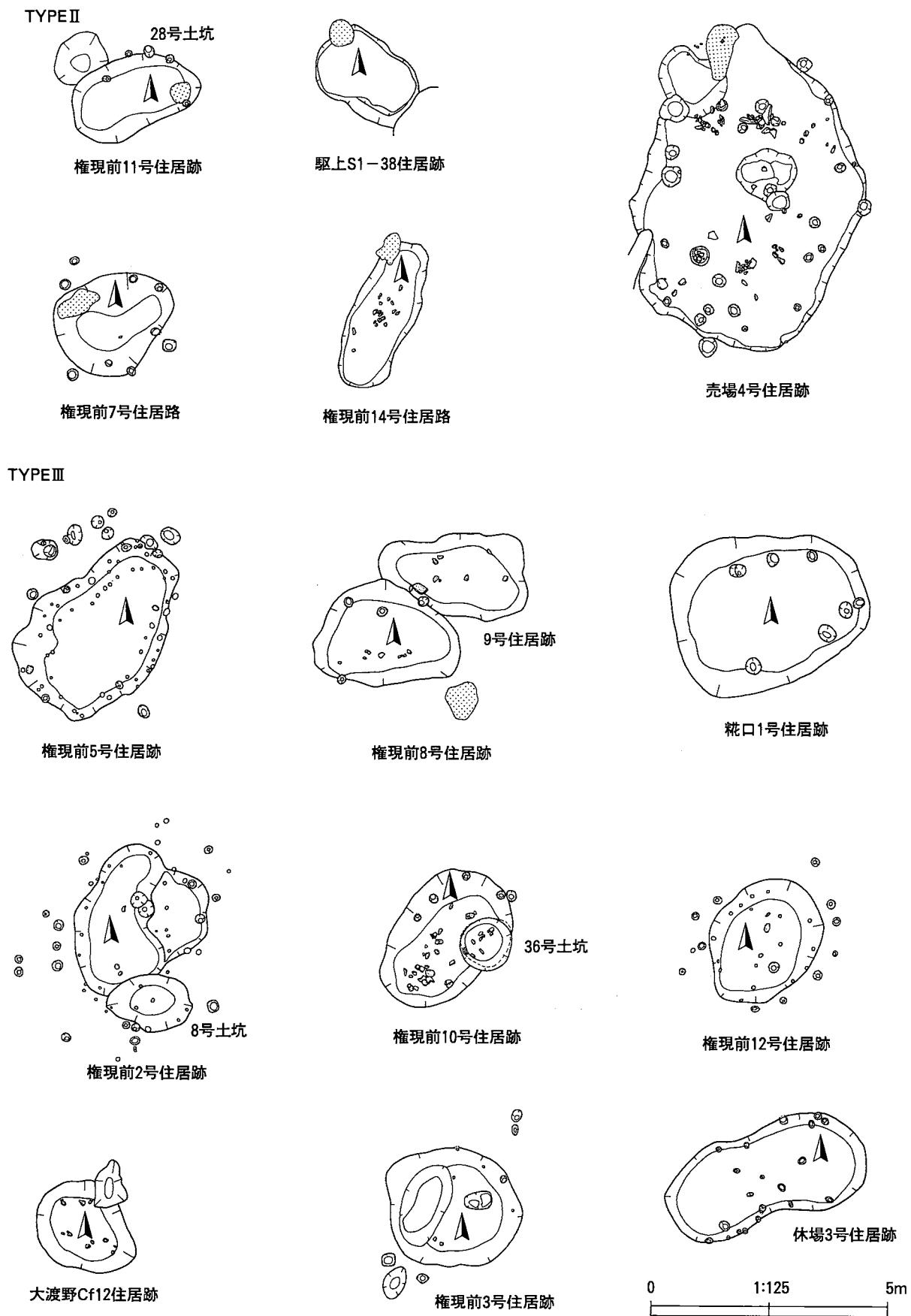
今回の調査では遺跡の上部が攪乱を受け層位的な遺物の取り上げはできなかったため、遺構毎の分類結果を第97図に示した。

これを見るとI群土器（早期末葉＝表裏縄文系）が検出された住居跡はII群土器（前期前葉＝羽状縄文系）が出土した住居跡あるいはこれと同期と考えられる住居跡に比して不整形でしかも規模が卑小なものが多く、前期前葉と考えられる住居跡は規模も比較的大型で隅丸方形に近いことが分かる。

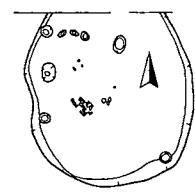
遺構の大半からは表裏縄文系土器が出土しており、権現前遺跡は早期末葉～前期前葉の中でも特に早期末葉～前期初頭を中心とした遺跡であると言えよう。



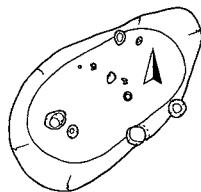
第91図 表裏縄文期における住居跡図(1)



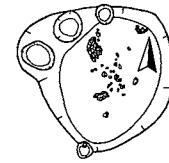
第92図 表裏縄文期における住居跡図(2)



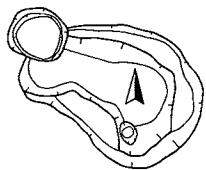
休場7号住居跡



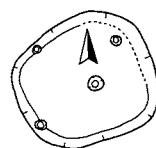
休場6号住居跡



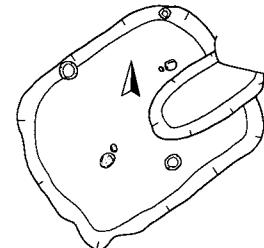
休場1号住居跡



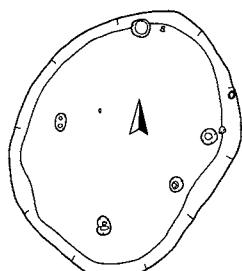
駆上S1-33住居跡



大渡野Ca56住居跡



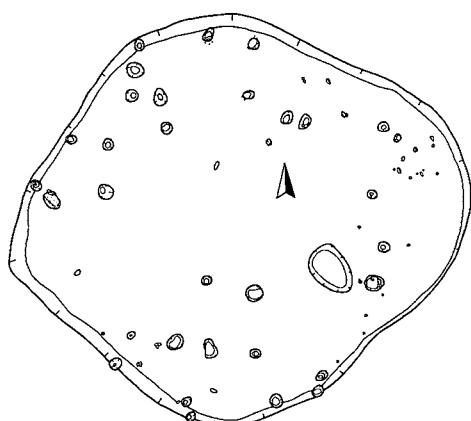
尼坂D-2住居跡



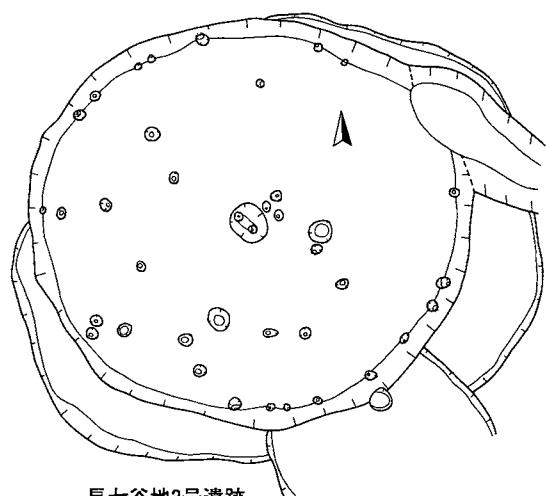
休場4号住居跡



壳場6号住居跡  
(早稻田5類—壳場VIII—長七谷III群期)



休場5号住居跡



長七谷地2号遺跡  
1号住居跡  
(早稻田5類)

0 1:125 5m

第93図 表裏縄文期における住居跡図(3)

これに対しⅡ群土器が出土している大木2a期の1号住居跡や15号住居跡は隅丸方形を基調とし住居のほぼ中央に付属施設が構築されている。特に1号住居跡のテラス状の施設や北側に巡る周溝、壁の中場から検出された柱穴の存在は他に比して本遺跡での大きな特徴といえる。壁中場から検出された柱穴の直径は約7cmで、約40度の角度で壁面に構築されているため屋根材を支える垂木の跡と考えられる。屋根材は検出されなかったものの床面には支柱となる4基の柱穴も1号住居跡、15号住居跡から検出され住居の構造が確認された（写真図版6参照）。支柱穴は87～90度で造られているため、僅かに内傾する構造を持っている。

1号住居跡の上屋の高さは推定ではあるが3mに達し、平面形も4.5×5.5mで、早期末葉と考えられる5号住居の上屋（高さ約2m）の規模を大きく凌ぐ規模を持っている。

県内外の前期初頭～前期前葉（長七谷地Ⅲ群～大木2b期）の住居跡は上八木田Ⅱ遺跡で比較的まとまって検出されていることから、上八木田Ⅱ遺跡の9棟に権現前の3棟や県内外の主な住居跡を比較したものを見た（大型住居を除く）に示した。

早期末葉の住居に不整な形状の住居跡が多いのに比べ一見して方形や橢円～長方形を基調とした整然とした形状の住居跡が多いことが読みとれる。

炉を伴うものと伴わないもの、壁際に柱穴が巡るものや検出されないもの、床面中央に一本柱の主柱穴を持つもの、あるいは上屋構造に関係する柱穴を住居の周囲に持つものなど形態は多種にわたる。

権現前1号住居の北側では周溝が検出され、北側の周溝は千鶴8・9号住居跡でも検出されている。上八木田ⅡXD8g-3号住居南西側にみられる溝状は周溝以外の遺構であることが述べられている（千葉：1995）ため、住居北側の周溝は地域的な特徴とも考えられる。

住居中央に1本柱を伴う住居跡は宮城県の今熊野遺跡に顕著にみられ、3号・6号・21号・24号住居跡は形状も完全な方形を示す。名取川を挟んだ三神峯遺跡3号住居跡と比較しても形状の違いは明瞭であり、遺跡の大きな特徴であることが分かる。

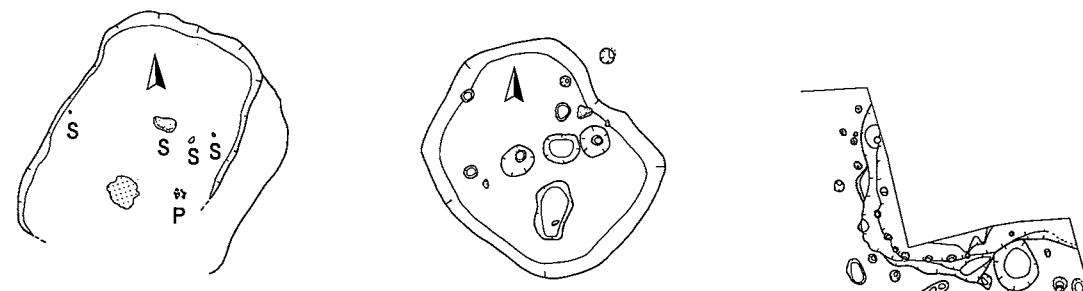
1本柱を持つ住居跡は大木2b期の住居である中曾根Ⅱ遺跡の150号住居跡にもみられる。

これらの住居の上屋は、中心の支柱に垂木を組み上げるピラミッド形の構造と推定される。今熊野遺跡の住居はこれに該当している。権現前1号住居跡等は円錐形とピラミッド（四角錐）形の中間を示しているとも考えられる。

三神峯3号住居跡では住居上屋に係わる柱穴が検出されている（岩淵・佐藤：1980）が、権現前5号住居跡でも住居周辺から検出されたP8が復元の結果（写真図版42参照）、上屋を支える柱穴であったことと合致している。

また、権現前1号住居や千鶴第8号・9号住居跡で検出された住居内の周溝は、県内の表裏縄文期の住居跡にはみられず県内前期初頭～前葉の住居跡の特徴と考えられる。

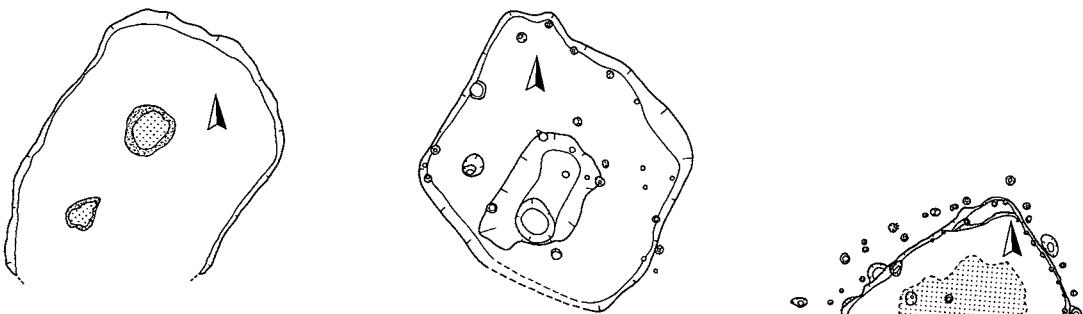
早期末葉に続く前期初頭の長七谷地Ⅲ群期と考えられる壳場遺跡3号住居跡や8号住居跡、長七谷地8号遺跡2号住居の形状は不整で、早期末葉住居跡の形状に近い形状を持っており、これまでの編年（第28表参照）からも長七谷地Ⅲ群の位置づけに合致している。



上八木田 IVIC2g住居跡

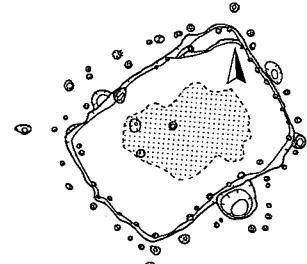
権現前4号住居跡

三神峯第2号住居跡

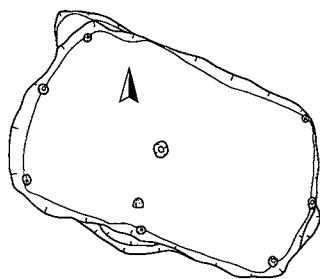


上八木田 IVIC2g-2住居跡

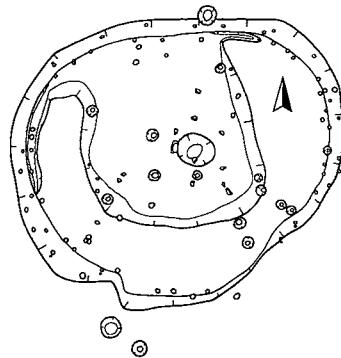
権現前15号住居跡



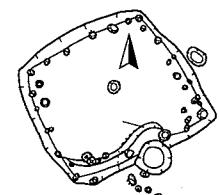
三神峯第3号住居跡



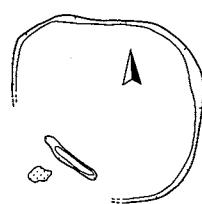
上八木田 IIID5住居跡



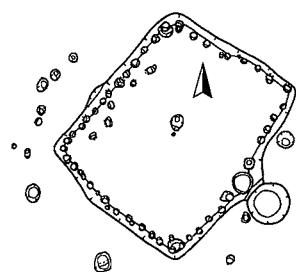
権現前1号住居跡



今熊野Ⅱ 12号住居跡



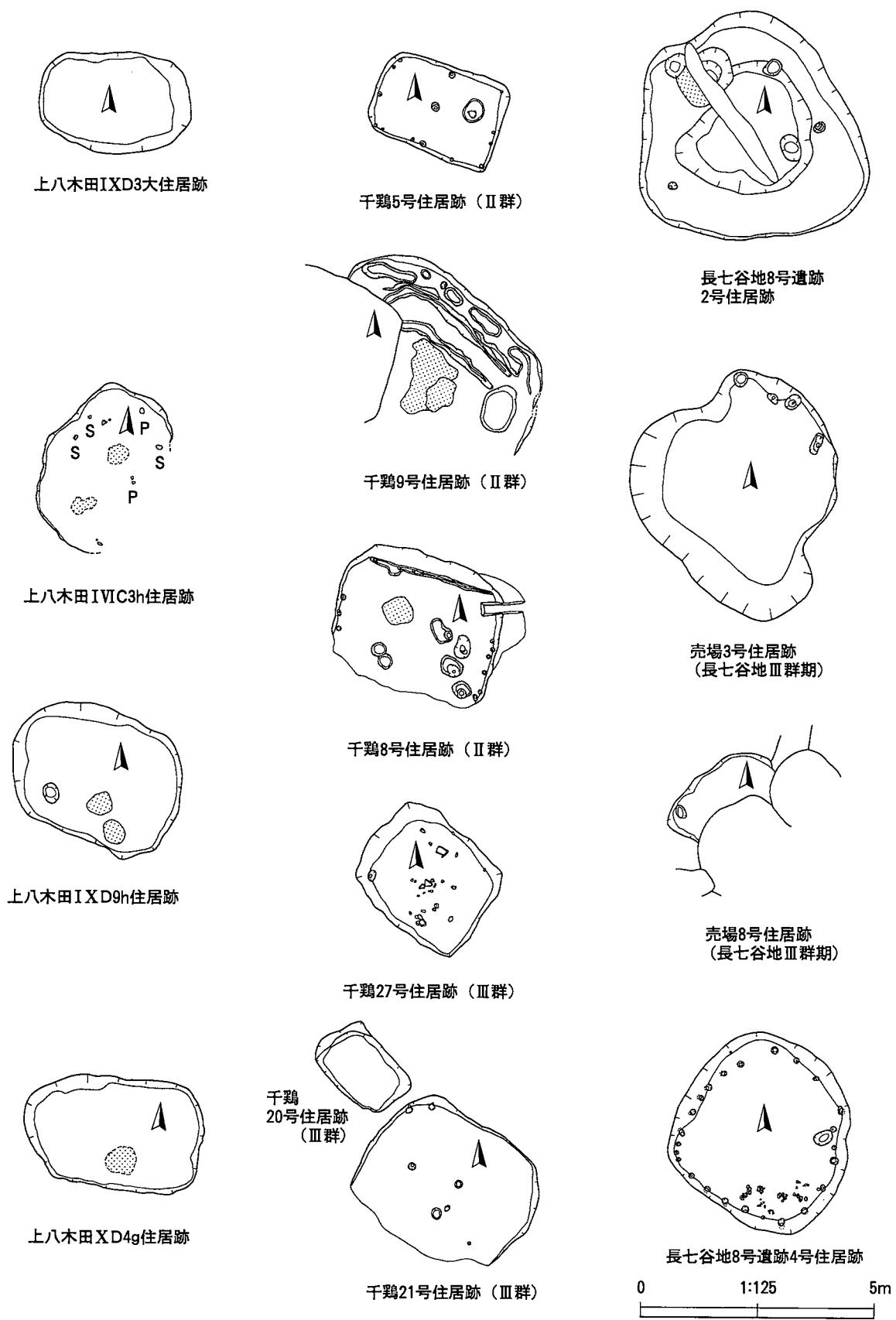
上八木田 IIID8g-3住居跡



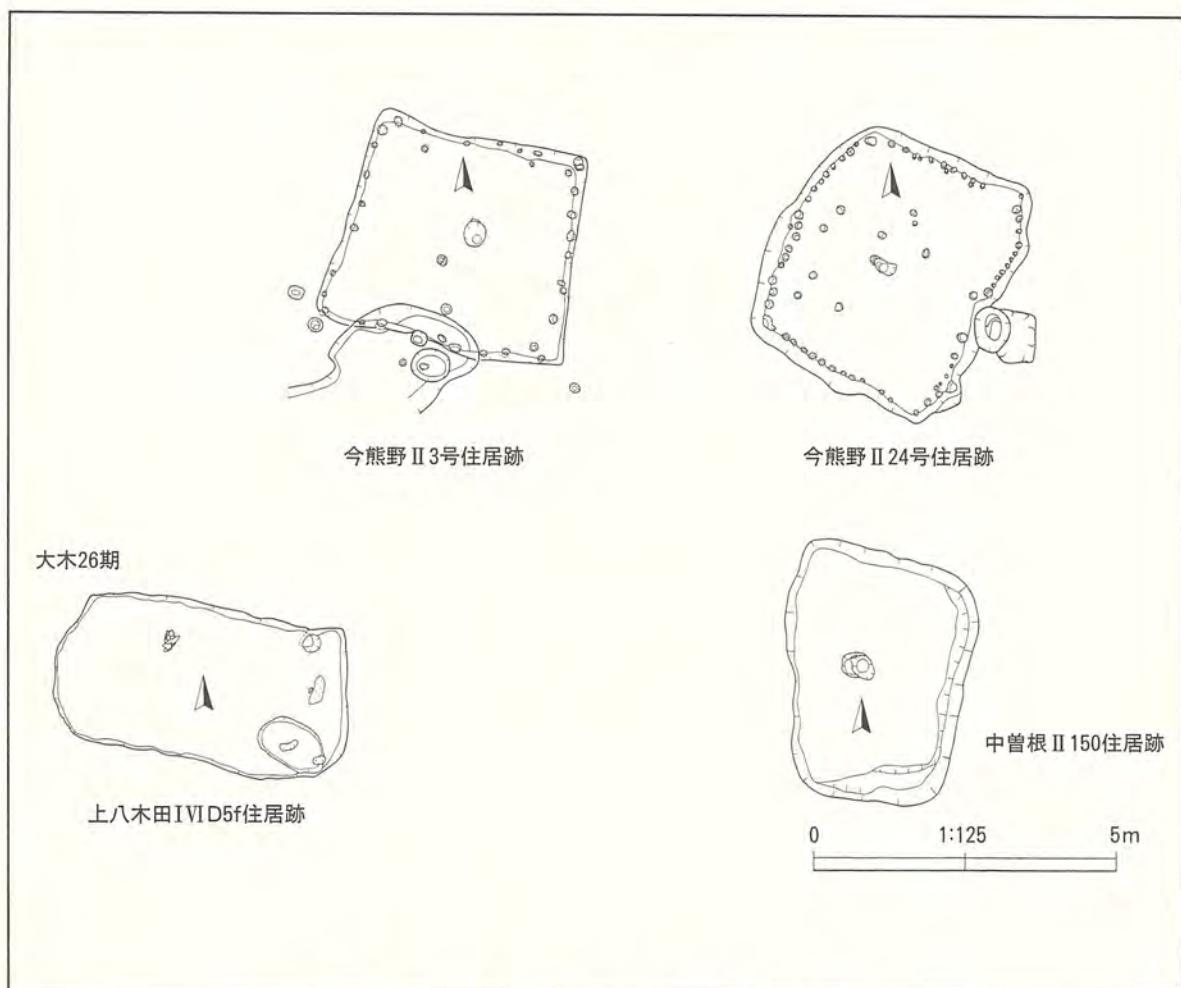
今熊野Ⅱ 6号住居跡

0 1:125 5m

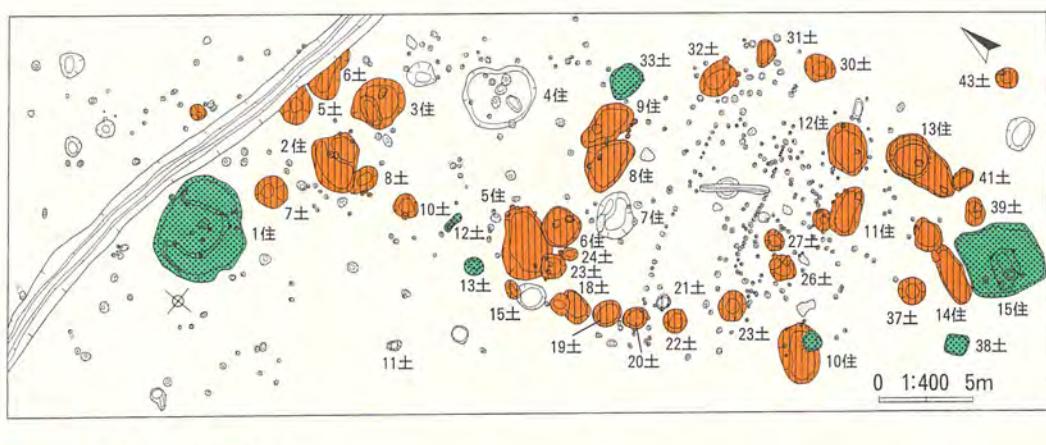
第94図 繩文時代前期初頭～前葉における住居跡(1)



第95図 繩文時代前期初頭～前葉における住居跡(2)



第96図 縄文時代前期初頭～前葉における住居跡(3)



■ I 群土器 ■ II 群土器

第97図 分類別土器出土状況